時空の雑器

川西葉吉

名古屋市天白区の焼山に住んでいた頃、東山の東端の雑木山をよく散策した。焼山は星ヶ丘と植田を結ぶ中間に位置し、牧野ヶ池公園の西に当たる。当時は人家はまばらで、農家が点在するのどかな田園風景が丘陵地に広がっていた。畑には時おり雉が鳴いていた。

ある日雑木山に入って、坂道を登る途中の傾斜地にショベルカーで削られた赤土の更地があった。そこに日の光に反射してキラキラ輝く小さな破片を目にしたのである。手に取って見ると、緑色の陶片であった。こんなものがなぜ雑木林の中にあるのかと不思議でならなかった。あたりを注意深く目を凝らすと、それがいくつも土に混じって露出しているのである。これを拾い集めるのに夢中になっていた。これは土中にもっと埋まっているのではと思い、棒先で土をかき分けると、棒先が何かに突き当たった。手ですくい上げると、それは割れた大振りの平碗であった。灰色もしくは褐色のザラザラした器膚に流下した濃い緑の自然釉の対比には目を奪われた。そして豪放で素朴な平碗の姿形に心引かれたのである。

その翌週の休日に手スコップを持ってそこへ出かけ、土を掘り返してみた。すると、平碗、広口壺、小皿、陶硯などの陶片が次々と現われた。平碗は五、六個重なって出ることもあった。大半は割れていたが、その中には完全な形をしたのも含まれていた。残念ながら、それを取り外そうとして無残にも割ってしまった。

早速この陶片の発見を名大の考古学の研究員に連絡を入れ、現場を案内した。研究員によると、それは平安末期の雑器生産をした穴窯による製品であるという。実は名大から動物園を含めた東山一帯は、奈良時代から平安末期までの窯業地で、その窯跡が無数にあるそうである。東山から天白区、緑区、日進、豊田市にかけての猿投古窯群は、東山が発祥の地といわれている。猿投古窯群から知多、渥美半島、そして瀬戸、美濃へと波及していったという。つまりはこの東山が東海地方の窯業の出発点であったのである。研究員は案内した場所の上に穴窯の遺構が土中に存在しているはずだと話していた。陶片の出た場所は、不良品を廃棄した物原だったのである。

僕はこの事実にいささか高揚して、遠い時代を想像していた。焼山という地名は、陶器を焼いた山というのが由来なのであろう。奈良時代から平安末期までは約四百年である。その四百年の間、東山一帯は幾筋も窯煙があちこちに立ち昇っていたのである。今日の焼山は、新しい環状線が貫通して走行する車が多く、またビルや人家が立ち並び、僕がいた頃とはすっかり変貌している。もう畑はなく、その畑の隅に積まれてあった須恵器の陶片をよく目にしていたが、それはどこを探しても見当たらない。

多治見に移り住んで志野や織部に魅了されたのだが、焼き物に関心を持ったのは、やはり東山の雑木山での陶片の発見がきっかけであった。

志野といえば、わが国で最初の白い焼き物であると同時に絵付けがなされた最初の焼き物であった。その志野の先駆けが灰志野と呼ばれるものである。これは長石釉（志野釉）を安定させるために従来からの灰釉を混ぜて焼いたことをいう。今日に現存する灰志野が徳川家と前田家に伝来した重文の白天目茶碗である。志野天目ともいうが、その二つの碗の見込みには青い釉だまりが出来ている。灰釉の表れである。長石釉単味の志野が完成する前の製品ということになる。

僕は土岐市妻木山の山頂にある妻木城址の石垣下から、この白天目の小さな陶片を二個拾ったことがある。それは白い器膚が青味を帯びていて、明らかに灰志野であった。白天目の実寸大の図録と照らし合わせると、口作りや肩の傾斜がぴったり一致した。まさしく重文の白天目と同一の茶碗の陶片であった。要するに妻木城主の妻木家は白天目を使用していたことになる。それもそのはず、妻木家は美濃の東濃地方の窯業を管理していたのであった。

この妻木家は、美濃守護職の土岐氏の支族で、明智氏と同族であった。光秀の母がこの妻木城で誕生したといわれている。おそらく光秀の母は明智家に嫁いだのであろう。同じ一族の斎藤氏から出たのが春日局である。妻木家は関ヶ原戦前に徳川方に就いた。当時の美濃は大半が西軍に属していたので、家康は何かと妻木家に配慮している。妻木城の修復に人足二百人の応援を出したり、また江戸城の瓦を妻木山麓の御殿窯で焼かせたりしている。美濃の山国の小大名にすぎない妻木家に対して破格の処遇であった。

妻木家は白い焼き物を誕生させた快挙もあって、その白天目を徳川家と前田家に献呈したのではなかろうか。なぜ徳川家と前田家かというと、秀吉亡きあとの五大老の

中では家康と利家が突出した実力者だったからである。妻木家は双方の面目を立てたのだと思われる。

天目茶碗というのは、もとは禅僧が用い、中国からかなり舶載されていた。禅の普及と茶道の隆盛とともに、わが国でも瀬戸や美濃で大量に焼かれるようになった。それは殆んど黒、もしくは茶褐色の鉄釉であった。それだけに白天目茶碗の出現は、瞠目に価する珍しい焼き物だったのである。とはいえ、その灰志野も窯跡の出土状況から推して小皿などの相当量の雑器を焼いていたことがわかる。このことは決して忘れてはならないと考えている。

焼山を去ってから二十年を経過して、その雑木山の現場へ行ってみると、新しい民家が何軒も建っていた。陶片を拾った場所はどこであったのか分らないほどであった。おそらく窯は発掘調査されないままなのであろう。

懐かしい雑木山の道を歩いていると、初冬の風がゴオーと吹き渡ってくる。枯葉がパサパサと舞い落ちる。志野、織部を焼いた美濃の山中もそうであるが、こういう風や枯葉の落ちる音に接すると、何だか粗末な身なりをした古《いにしえ》の陶工と出会うような気がする。生きんがため必死に働いた名もなき陶工の仕事場がここにあると教えているかのようにである。窯業は土の掘削と薪の伐採から始まって、土練り、成形、乾燥、絵付け、釉掛け、窯入れ、火入れ、窯出し、出荷という一連の作業は重労働である。特に窯出しの際、余熱が残る窯の中は高熱に達し、夏の暑い日などは身体が乾ききって汗も出ない。そこに虚飾と誇示はなく、また世に注目もされず、雑器生産にひたすら従事して生涯を終えた陶工の姿が浮かび上がる。

雑器は一般民衆、特に農民層に使われるのを目的として焼かれた。今日評価の高い志野、織部も決して茶人のための器だけを焼いたのではなかった。雑器も想像以上に焼いていたのである。その窯跡が数多く確認されている以上、茶器だけでは採算が取れなかったはずである。志野、織部の真価はここにあると僕は思うのである。雑器は使い捨ての要素が強く伝世品は稀であるが、当時の織部の手水鉢や一升枡一のような雑器でも織部の魅力を何ら損なうことはない。

一度こんなことがあった。ある古美術店の主は、織部の正方形の鉢を近年に焼かれた煙草盆かと言っていた。向付の形とは異なっていたからである。僕はそれを目にして、唐草文の生き生きとした筆線に当時の織部ではないかと思い、安価で購入した。

持ち帰って、一体これは何だろうと思案した。まさかとひらめき、試みに一合づつの水を十回入れると、水は鉢の縁と寸分違わず水平になった。それはたしかに一升枡だったのである。織部は庶民の日常生活のための雑器をも焼いていたのであった。陶器は焼き上げると、成形した時の大きさよりも通常二割程度は収縮する。それを計算に入れて焼いた技術に改めて感嘆した。織部の文様の筆線にためらいはなく、また伸びやかで奔放である。志野、織部は茶器以外の雑器にも脚光を当てるべきではなかろうか。

東山の雑器にしろ、志野、織部の雑器にしろ、素晴らしい技を持った無名の陶工達によって生み出されたことに何よりも尊さを覚える。陶工は高級な器を焼く者、そして雑器を焼く者との差があった訳ではなく、みな共通の技を持って、製品を拵えていたのであった。さりげない雑器といえども、それを焼いた陶工こそが当時の一文化の具現者であったに違いない。このことに思いを馳せると、東山と美濃の陶工は時空を超えてつながっていたような気がするのである。

完